（ 続紙 １）

京都大学	博士（地域研究）	氏名	千葉悠志
論文題目	現代アラブ・メディア圏の形成と展開 ―汎アラブ・ラジオ放送から衛星放送へ―		

（論文内容の要旨）

本論文は、20 世紀中葉に成立してから現在まで発展を続けているアラビア語を媒体とするメディア圏について研究をおこなうものである。本論文ではそれを「現代アラブ・メディア圏」と名付け、アラブ諸国を対象とするフィールドワークによって実態の究明をおこなっている。このメディア圏は汎アラブ・ラジオ放送によって幕を開けたトランスナショナルなメディア空間であり、近年は衛星テレビ放送を通じて非常に活発なメディア空間となっている。

本論文は、３部８章から成る。

第Ⅰ部は「アラブ・メディアを論じる視角」として、理論的な諸問題、先行研究レビュー、対象地域の意義づけなどをおこなっている。

第１章では、国際コミュニケーション研究とアラブ・メディア研究の先行研究を丁寧に検討し､本論文では地域研究とメディア研究の架橋を目指すことを表明している。

第２章では、現代アラブ世界の概観を、媒体としてのアラビア語とその地域差、20 世紀におけるアラブ民族主義の高揚といった歴史的背景、個別のアラブ諸国の概要などから説明し、対象地域を明確に線引きしている。

第Ⅱ部は「アラブ・メディア圏の形成と展開」として、汎アラブ・ラジオ放送の揺籃期から衛星テレビ放送が登場するまでの時代を扱っている。

第３章では、エジプト革命（1952 年）以降にナセル政権がとったアラブ民族主義およびそれを広めるための汎アラブ・ラジオ放送の確立について詳論している。

第４章では、ポスト植民地期において、欧米が支配する国際的なメディア状況、すなわち情報の南北格差を打破するために第３世界の国々が希求した｢新国際情報秩序｣形成の試みを描いている。この試みが失敗に終わった経緯、その歴史的な意義、新秩序形成のためにチュニジア出身のマスムーディーが果たした国際的な役割、アラブ諸国が情報共有のために設立した組織などが分析されている。

第５章では、さまざまな情報が国家統制の壁を超えて流通する面を明らかにしている。特に国際ラジオ放送、アラビア語新聞、カセットテープなどが重要な媒体とされる。これらはアラブ域内で発信されて各国の国境を超える場合も、欧米などの非アラブ圏から発信されてアラブ各国で流通する場合もある。

第Ⅲ部は「衛星放送時代の到来とアラブ・メディア圏の新展開」として、1990 年代から現在に至る時期を扱っている。

第６章では、アラブ世界における衛星テレビ放送の隆盛が豊富なデータを用いて概観されている。

第７章では、衛星放送の事例として、アルジャジーラ、MBC グループ、アラブ・モーターズ TV、セブン・スターズ TV が取り上げられ、経営形態から具体的な放送内容までが分析されている。

第８章では、グローバル化によってアラブ・メディアが多様化している実態が明らかにされている。特に、放送のコンテンツを制作し、衛星に向けて発信する「メディアシティ」がエジプト、ヨルダン、ドバイなどに設立され、互いに差異化を志向する中でアラブ・メディアの多様性が増していることが指摘される。

結論では、汎アラブ・ラジオ放送を通じたアラブ・メディア圏の形成から、国境を超える多種のメディアによる情報の流通や、1990 年代以降の衛星テレビ放送の隆盛によって多様性を増している現状に至るまでが総括されている。

（続紙　２）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、中東地域研究の１つの研究として、アラブ諸国の国境を超える汎アラブ的なメディア圏を取り上げ、それが 20 世紀半ばに成立して以降現在の衛星テレビ放送時代に至るまで発展と変容を続けている実態を明らかにするものである。本論文では、そのようなアラビア語を媒体とするメディア圏が「現代アラブ・メディア圏」と名付けられ、アラブ諸国におけるフィールドワークやメディア・コンテンツの閲覧・分析などを通じて、その実態の解明がなされている。

アラブ・メディアについては、2000 年代においてアルジャジーラ（カタルの衛星テレビ放送）がアラビア語を用いる国際的な放送として名声を博してから注目されるようになったが、それ以前は欧米でも日本でもほとんど研究がなかった。また現在でも、アルジャジーラ以外については十分な研究が存在しない。本論文はそのような研究上の空白を埋める貢献をなすものである。

本論文の学術的な貢献は、主として次の５点にまとめることができる。

第１は、アラビア語を媒体とする「アラブ・メディア圏」が過去 60 年ほどにわたって成立・継続してきたことを、多種多様なデータを用いてきわめて実証的に明らかにした点である。

第２は、世界的なメディアの拡大やグローバル化の現状から敷衍して、アラブ・メディア圏も単線的に発展ないしは拡大してきたと推定する見方に反して、汎アラブ・ラジオの時代と衛星テレビの時代の間に、メディアが国境内に収縮し国家統制下に置かれた時代があったことを明らかにした点である。越境するラジオ放送は短波で遠隔地にまで届いたが、国内向けのテレビ放送は国境を越えることができず、いずれの国でも放送内容は強い国家統制を受けた。このことを明らかにした意義は大きい。

第３は、国際コミュニケーション研究と地域研究の架橋を試みている点である。国際的な情報の流れやトランスナショナルな放送については国際コミュニケーション研究の分野で研究がなされているが、この分野ではアラブ・メディアの研究者はほぼ不在で、また中東地域研究においては国際コミュニケーション研究での理論や国際比較がおおむね無視されてきた。そのような研究状況において、本論文が両者の架橋を試みていることは高く評価される。

第４は、1970 年代の「新国際情報秩序」形成の試みについて、詳細な再構成をおこなった点である。アジア・アフリカ諸国が次々と独立を遂げる中で、欧米やソ連が国際的な情報の流れを支配していることを批判して、かつて改革の試みがなされた。その事実は今日では忘却されているが、それを掘り起こして再構成すると同時に、チュニジア出身のマスムーディーを初めとしてアラブ人がそこで大きな役割を果たしていたことを明らかにした功績は大きい。情報流通の南北格差を打破することは、衛星テレビ時代となってアルジャジーラが商業的に成功するまで非常に困難であったが、70 年代の試行を想起することは現在のメディア状況を適切に評価するためにも必要なこ

とである。

第５は、現在のアラブ衛星放送の実態について、アラビア語運用能力を生かしたフィールドワークおよびコンテンツの分析から明らかにしたことである。衛星放送は衛星からの電波が国境を越えることが強調されることが多いが、衛星に向けて発信するのは地上の施設からであり、番組制作の現場も地上にある。それをコントロールするために「メディアシティ」が主要国に建設され、多くの放送局を誘致するために熾烈な競争がおこなわれている現実を明らかにしたことは、大きな功績である。また、そのような競争があるために、グローバル化がメディアの画一化をもたらすのではないかという予見に反して、アラブ・メディア圏では多様性が生じているという指摘も重要である。

本論文は、以上のように中東地域研究に大きな貢献をなすのみならず、さらに、国際コミュニケーション研究にとっても貴重な貢献をなすものと考えられる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 25 年 2 月 1 日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。